



I はじめに

分科会を始めるにあたり、実践協力者・報告者の自己紹介、諸注意等がなされた。

その後、報告資料集記載の内容をもとに、分科会の基調提案と討議の柱の確認がされた。「～地域の教育力・子ども会活動・啓発活動・学習活動・識字運動・文化創造～部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか」という分科会のテーマに沿って、子どもたちの「事実」を出発点に、差別の現実を見つめ、さまざまな取組による子ども・保護者・教員・地域をはじめとする様々な立場の人の変容を実践報告をもとに議論していくことが実践協力者により呼びかけられた。

日程説明の後、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

(1日目)

－報告1－⑩

「和太鼓活動を通じて人とのつながりができた」
(大阪市人教)

－主な質疑と意見－

兵庫 太鼓をはじめとする様々な取組報告の中に、たくさんの若い世代の人がいる様子が伝わってきたが、どのようにして人を集めているのか。

報告者 まずは、地域の小中学校に向けての発信をしている。また、啓発活動で行かせていただく学校の子もたちや保護者に私たちの活動について知っていただき、つながりが広がっている。さらに、週に1回「子ども太鼓教室」を行っており、そこに参加してくれている子たちが浅香太鼓集団「獅子」に入ってくれている。

兵庫 子ども食堂の活動について詳しく教えてほしい。例えば、予算と一緒に活動するメンバー、来てくれる子どもの数の把握方法、計画・運営などについて。

報告者 予算については、浅香会より助成金の申請をしている。活動は、浅香会のメンバーだけでなく、大阪公立大学の学生(ボランティア)や保護者など様々なつながりが広がり、増えていっている。事前申し込みはしていないので、どれくらいの参加が

あるのかは予想できない。雨の日などは、とても少ないこともある。保護者の送迎もお願いせず、自分たちで来ることができる場としている。最近では、子ども食堂だけでなく、大阪公立大学の学生の力も借りて、学習支援についても一緒にできるようになってきた。

徳島 学校現場での人権啓発の講話について。一定の学校に毎年言っているのか、依頼があってその学校にいつているのか、講話の内容について教えてほしい。また、地域防災の観点から、まわりにどんな人が住んでいるのか知るのとはとても大切だが、個人情報の保護が理由に把握が難しいのも実態としてある。どのように把握しているのか。

報告者 依頼があった学校や団体に行っている。毎年決まった学校・団体という訳ではなく、大阪府下を中心に様々なところへ行って話をしている。対象学年や内容は学校や団体側とよく話をして決めるようにしている。部落問題やいじめの問題、SNSでの誹謗中傷の話など様々。地域防災について、区役所に頼るのではなく、まずは自分たちで自治会単位での現状把握を行っている。自治会の会長と(報告者は副会長)連携をしながら様々な取組を進めている。実際に足を運んで、地域に住んでいる人と話をし、地域のみならず災害が起こったときにどのように助けるか、助けてもらうのかということ日々話し合っている。

福岡 沖縄での活動も続いているようだが、このような取組や交流はどのような経緯で実現することになったのか。

報告者 地域の浅香中央公園には沖縄の守り神であるシーサーの銅像が立っている。これは、沖縄と大阪で活動されている金城実さんの作品であり、この金城実さんは彫刻家であり、運動家であった。その方とのつながりがあって、沖縄での活動も実現した。

－報告2－⑭

「心の拠り所のある地域づくり」

(高知県人教)

－主な質疑と意見－

広島 スマイルファクトリーとは、どのような団体で、どのような取組をしているのか。

報告者の応援者 任意団体として活動をしている。和太鼓の活動や地域の行事の企画・運営、子ども食堂の開催など子どもから高齢の方に参加していただける地域の取組を実施している。また、学校現場への啓発活動をしている。

兵庫 子ども食堂について。150人の参加があるということだが、予算の財源や運営について教えてほしい。

報告者 スマイル食堂は人数制限を設けていない。

子どもだけでなく、誰でも来ることができるようにしている。予算の財源は、補助金や活動の中で得ることができたお金や地域の方からの寄付などが中心。木曜日に開催しているが、家庭の実態を見た時に、1週間の中で木曜日がとても疲れるという意見や自身の実感があり、そのニーズにこたえるようなかたちで実施している。

滋賀 不登校の問題と部落問題は同じ問題なのではないかということで滋賀県では取組を進めている。報告者自身は不登校の問題をどうとらえているのか。不登校は、不登校の子どもに問題があるのか。母親としての思いをぜひ語っていただきたい。

報告者 学校に対しての怒りもはじめはあったが、それをぶつけても解決にはならないと考えた。自分の子が不登校になったが、それは子どもにしか乗り越えることができないし、乗り越えるべきだと思った。今、本人が学校に行きたくないと言っている気持ちを母親として受け止めることが大切だと思った。太鼓の活動を通して、子どもが変わっていったというのは事実としてあるし、嬉しいこと。

福岡 居場所作りという意味での不登校支援というニーズは現在とてもあると思う。その取組について教えてほしい。学校との連携について詳しく教えてほしい。

報告者 和太鼓や盆踊りの活動を通して大切にしていることは、関わり続けること、信頼関係を作っていくこと。根気よく子どもたちと関わり、認めることを大切にしている。学校以外にも信頼できる大人がいることを伝えている。保護者とのつながりをつくることも常に心がけている。それを学校とも共有している。

愛媛 差別発言のことにについての質問。差別発言をした人に対して、またはその現実に対して、市民館(隣保館)の職員として、どのような啓発活動につながっていったのか。

報告者 仲間やパートナーと差別発言についての話を重ねた。息子の友だちの母親からの発言ということもあり、その時は何も言うことができなかった。次、同じようなことがあれば、必ずその差別発言について話をしたいと決意した。実際は、何もできていないというのが、現状である。

愛媛 自分にとって近い人だからこそ言うことができなかったという気持ちはよく分かるが、やっぱり言っていないといけなと思う。

三重 報告よりたくさん刺激をもらった。自分自身も太鼓を子どもの頃にたたいていたので話と重なった。しかし、今そのときのメンバーとのつながりがなくなってしまった。スマイルファクトリーでのつながりがずっと続いているのはどうしてだと考えるか。

鳥取 自分自身も不登校の頃があった。スマイルファクトリーの取組をどのように発信しているのか。
報告者 地元で太鼓がずっと継承されているという実態がある。その太鼓の音色を聞くと、昔のこともそのつながりも思い出すことができる。また、太鼓をたたきたいと思ったときにその場があるのかが大切。情報発信については、SNS を活用して取組を伝えるようにしている。チラシを配ることもしている。

－報告3－⑱

「女性住職が観る現世」 (三重県人教)

－主な質疑と意見－

広島 せんだら問題と部落差別の問題について、真宗大谷派としてどのような反省と啓発などしているのか教えてほしい。

報告者 学習会は行っているが、門徒の人に差別の歴史について話をすることはできていないのが現状。

兵庫 ジェンダーについて、専業主婦になったときに強く考えるようになった。アンコンシャスバイアス、女性はこうあるべきだということを感じることが多くなった。女性差別の問題をぜひ男性によく考えていただきたい。思ったことは、小さな声でもあげていくべきだと思う。

滋賀 自分が知らないということはどういうことなのか考えていけなといけな。色々な人権問題には向き合ってきたつもりだが、性差別については深く考えてこなかったことを反省している。家庭の中で、とてもつらい時期を過ごされたようだが、その時の気持ちはどうでしたか。

報告者 その状況がおかしいと思っていなかった。当たり前だと思い込んでいて、何が問題なのか気づくことができていなかった。自分を大切にすることや女性の自立という発想がその時はなかった。差別の問題は、まず自分が気づくことが大切で、常にアンテナを立てておくことが必要だと学んだ。

滋賀 女性差別をするのは男性だけなのか。そうではないと思う。男性の中でも女性差別をなくすために活動している人がいる。男性が加害者、女性が被害者ではなく、みんなで考えていけなといけな問題だと思う。部落差別の問題でも同じことが言えると思う。

報告者 その通りだと思う。ただ、社会の問題として考えたときに、男性中心の社会の構造になっているのが現状で、お互いが歩み寄って話し合っていくことが大切だと思う。

滋賀 様々な差別が複合的にからんでいるという

考え方をしていけないといけなと思う。男性・女性ということにこだわりすぎている気がする。それがいの性的マイノリティの存在を考えるとできていないのではないか。

(2日目)

－報告4－⑮

「あなたは あなたのままで すばらしい」
～子どもたちの未来を信じて～

(鳥取県人教)

－主な質疑と意見－

三重 馬との出会いによって子どもが変わったようにはじめは思ったが、話を聞いていて違うなと思った。人との出会いがA児を変えたと思う。ハーモニカレヅジに来るこの背景には何があるのか。A児との出会いから報告者が学んだことはあるのか。

報告者 子どもの数だけ背景がある。いじめや勉強など様々なものがあるが、共通するのはまわりにいる大人に自分の思いを理解してもらえていなかったという子が多い印象がある。だから大人を信用していないことにつながっている。だからこそ、言葉は通じないけれどコミュニケーションをとることのできる「馬」という存在が、ハーモニカレヅジに来る子にはよかったと思う。馬と関わることで相手のことを理解すること、自分のことを見つめなおすことにつながっていく。A児と関わることで、子どものことを信じる大切さについて学んだ。

兵庫 不登校の子の背景は色々だと思う。その子どもの自己肯定感を高めて、夢をもって社会に出ていく子どもを自分自身も育てていきたいと思う。学校との連携や社会とつながるということについて詳しく教えてほしい。

報告者 昔は、学校のことを全然知らずに連携もすることができなかった。現実を考えたときに、学校と比べるとフリースクールではできないことがある。教材や人材、場所の問題など。学校と話し合いをする機会を増やしている。最近では、学校と連携をしながら、時には学校をつかひながら子どもたちの可能性を広げることができている。フリースクールとしての認可を受けることができたのも、学校とのつながりを考えると大きかった。地域の方との連携も増えてきて、ハーモニカレヅジに関わってもらっている。社会とつながることが子どもたちの学習になっている。

三重 A児自身が、昔の自分自身と向き合ってふり返ったことはあったのか。

報告者 ハーモニカレヅジは大人になった卒業生に支えてもらっている。昔のことを楽しく話す姿がとても印象的。でも、そのことがあったから自分が変わったと、子ども自身も感じている。当時の辛かった経験も、今の自分につながっていると思っ

れている子が多い。学校や親に対する思いについてもふり返ることができている。今となっては、あの時のまわりの大人の気持ちが少し分かると言ってくれる子もいる。

大阪 自分で考えて行動する子をハーモニカレヅジは育てているのだなと思った。でも、今の学校は考える力を奪っているのではないかと思うことがある。ハーモニカレヅジでの1日のスケジュールを教えてください。

兵庫 本分散会のテーマであるまちづくりとして、報告者は、まわりの子どもたちに自分の考えをどのように伝えているのか。

報告者 ベースは、馬中心の生活になる。食べること、運動すること、手入れなど馬と一緒に生活をする中で1日のスケジュールが自然とできてくる。まわりの大人にいやいや働いている人がいないというのが、子どもたちに大切なことを伝えることにつながっていると思う。子どもたちには言葉というより、行動で伝えることを大切にしている。

－報告5－⑰

「ひとりみんなのために、みんなはひとりのために」

(滋賀県人教)

－主な質疑と意見－

兵庫 私たちも、小学生の子どもたちの学習の場を提供しているが、なかなか学校とつながれない現状がある。どのようにしているのか教えてください。

報告者 保護者や学校とのつながりを少しずつ広げていっている。要対協との連携も大切にしている。

滋賀 報告者が子どもの背景を知ろうと動かっている様子が印象的だった。子どもだけでなく、保護者とのように関わることを大切にしているのか教えてください。

報告者 保護者のしんどさを理解することができるよう努めた。子どもたちの背景を理解することは、保護者を知ること、理解することだと思っている。

滋賀 話の最後のリュウさんがアルバイトに来ることができなくなってしまったときのことをもっと詳しく教えてください。

報告者 子どもとの信頼関係を築くことが大切であり、このエピソードでは信頼関係をまだ築くことができていなかった関係性の中での指導があったからだと思ふ。私としても反省することが多い。

滋賀 学童保育での活動として、放課後以外の関わりはどこまでできるのか知っていたら教えてください。

(報告者や参加者などから答えはなかった。)

奈良 報告者の立場から見て、つながりはとても広がっているように見えるが、もっとこんなことをしていきたいというような展望はあるのか。

報告者 最近学童に関わる制度も変わり、できることが増えてきたように感じる。軽食の提供や送迎も最近するようになった。然し、公立の学童はきまりが厳しく、できることが限られていて困ることが多いと聞いている。学校現場で昔働いておられた方(定年退職された方など)にぜひ学童の中に入ってきてほしいと思っている。

Ⅲ 総括討論

(1日目)

広島 宗教について詳しく調べると、宗教と差別は非常に強く結びついているということに気づくことができる。

大阪 地域の中で、差別を見抜き、人権感覚を磨いていくということがとても大切だと思った。宗教の中にある差別ということについて初めて知ることができて良かった。

大阪 社会科の教員を長い間してきたが、その中で取り扱う「人権」についてふり返ったときに、知識だけだったなと思うことがある。平等とはどういうことか。平等であるべきことはどのようなことか。今の世の中で平等なことはなにか。子どもたちは、よく考え、自分の考えをもっているものだと思う。

三重 様々な差別について子どものころにうけた教育や経験はとても大切だと思う。

滋賀 「私を語っていきこう」ということを滋賀では大切にしている。自分自身のことを語っていくことで差別や偏見に向き合うことができる。

(2日目)

大阪 滋賀県の報告に対して質問できなかったので、この場で質問をしたい。リュウさんがアルバイトに来られなくなったのは、職員の方の一言だけが理由ではないような気がする。リュウさんは、誰とどのようなつながりをつくることができていたのか。注意を受けた場所はリュウさんの居場所だったのではないか。

報告者(滋賀) 他にもリュウさんとの信頼関係ができていた人もいた。しかし、まわりのアプローチがうまくいっておらず、そういう意味では、つながれていなかったのかもしれない。職員としての自覚がリュウさんの中にできていたからこそのできごとだったのかもしれない。

滋賀 なぜ差別があるのかということはずっと問い続けていた。実践の交流も大切だが、その中で何を大切にしてきたのか、何にこだわってきたのかということをもみんなで交流したいと思う。人を大切にするということは、みんなが分かっているが、なぜそれができないのか、何にしばられているのか共有したい。

滋賀 今、仕事をしている隣保館には、学校に行けないのではなく、学校に行かないということを選んだ子がいる。まわりの大人は、不登校の子どもをみるときに、その子どもと保護者に原因を見出そうとしている気がする。その子のせいにすることに差別の構造がある。そのようなおかしさに私たちがどれだけ向き合っていけるか。部落の子はすぐにかたまる、すぐにはみでると言われてきた。滋賀の報告者に会えてよかった。

大阪 第2の人生として地域で働きたいと思うようになった。子どもの時だけでなく、大人になった今でも自分の存在を認めてほしいと思うことがある。尊重されたり、褒められたりすることがとても大切だと感じた。楽しそうに働くことができていたのかを常に考えていきたいと思った。5本の報告から「居場所」の大切さを常に感じた。今の職場が、子どもたちや保護者にとっての居場所になれているか、支えになれているか考えるきっかけとなった。部落問題学習を通して、差別に気づく力をつけて行きたいと思う。

兵庫 女性差別は未だにあると感じている。男性も女性もいろんな性の方も一緒に生活をしている中で、みんなが生きやすい社会、まちづくりをしていきたい。全国の校長の中でも、女性の割合はまだ低く20%程度で壁を感じることもある。男性・女性関係なく、今の子どもたちが自由に夢に向かって歩める世の中になってほしい。まずは、私自身が、男性・女性関係なく生き生きと生きる姿を見せていきたい。私は、女性に生まれてよかったと思う。一人一人の意識で社会が少しずつでいいので変わっていったらいいかなと思う。

滋賀 「信じて待つ」という言葉について。信じて待つということは、とても辛いことで我慢のいることだと思う。ただ見ているだけでなく、きっとその子と関わっているのではないかと今回の報告で感じた。居場所って何なのかなということをも、自分の妹が不登校になった経験からよく考えるようになった。居場所を考えた時に、自分のいたい場所っていう考え方が大切だと思った。それが学校でなくても、自分で選んだ場所ならば良いのではないのか。いたいところがあるって素晴らしい。一人の子と真剣に関わることができないのに、多数の子と関わることはできない。

兵庫 女性差別は、社会の中に組み込まれた差別としてあるのではないか。社会の中には様々な壁がある。人権は思いやりではなく、知識である。知識がないから、差別がある。だから勉強することが大切。勉強をしていないから偏見がある。宮崎の研究会では、部落差別をなくしたいという大きなエネルギーをととても感じた。

兵庫 隣保館の学習サポートをしている。そこに来る子どもたちは、学習だけをしに来ている訳ではない。子どもたちの様子から、人と関わりたい、話をしたいという姿がある。今、子どもたちは話したいという気持ちはあるけれど、どんどん話す場所がなくなっていると感じる。自分の気持ちを自分の言葉で話せる子が減っていつてしまう。話せる場所があったり、話せる人がいたりしたら、子どもたちは話せる。だからこそ、そのような居場所を地域の中で作っていくことが大切だと思う。

滋賀 2日間を通して、この分散会のキーワードは「居場所をつくる」だったと思う。居場所というのは、気づいたことを行動にうつしていく場所、心のモヤモヤを受け止めてくれる人がいる場所、自分は一人ではないと感じることのできる場所、差別に対して声をあげることができる場所、追いかけて背中と出会える場所、自分の生き方と出会える場所だなど、5人の報告から学んだ。昔、担任していた子に、つながりたいなと思っていたけれど、なかなかつながることができない子がいた。月日が経って、大人になったその子と話す機会があり、「あの時、なんで話してくれなかったん？」と聞いた。すると、その子は「当時先生、忙しそうやったやん」と言っていた。その子に、一人で背負わせてしまっていた。居場所って作っていけると思った。

報告者(三重) 命に関わる状態にある人のアウトリーチを今後どのようにしていったらよいのかを考えさせられた。そのような人に手を届かせたい。それは、不登校の状態にある子についても同じ。どのようにして助けを求めている不登校の子やその保護者を見つけることができるのかを考えていきたいし、どのようなことが今なされているのか知りたい。

大阪 人権交流センターの取組を紹介したい。20代～40代の引きこもりの支援を担当していた。実際は、アウトリーチはできなかった。いろいろなアウトリーチをできる権限のある機関との連携を大切にしている。引きこもっていた期間、それを解消するには同じ期間を要すると言われている。若い人ほどその期間は短くできる傾向にある。家や学校ではない第3の居場所がとても大切だと思っている。大人になるとそれが減ってしまう。居場所がたくさんあることが大切。偏見をなくするのはとても難しい。偏見が差別に変わる瞬間がある。偏見を差

別に変えないためには、いろいろな人と出会う中で、自分が変わっていくことが大切。

高知 不登校の子も含めた弱い立場にある人を見つけることはとても大切だが、難しい。おせっかいと思われる方もたくさんいる。だからこそ地域の力が大切だと思う。

IV 2日間の総括(まとめ)

協力者 この2日間の分散会を通して様々な学びがあった。この全同教大会は、「今日も机にあの子がいない」という言葉もあるが、子どもたちの人権をどう守っていくか、部落差別をどうなくしていくのかということからの出発だった。この分散会では、子どもたちの「居場所」というのが大きな話題となっていた。居場所が複数あれば子どもたちは安心できる。少数派の人の声を大切にすることが大切である。アンコンシャスバイアスにいかにつづいていくことができるかを大事にしている。差別行動の背景には何があるのか、社会構造の中に差別があるのではないかについて、これからも考えていきたい。学校という場所が、すべての子どもたちにとって安心することのできる場所になることが大切であるが、それがすべてではない。学校に行きたくても行けないという子の存在がある。居場所は複数ある方がよい。それを地域が作っていけるかどうか。たくさんの声を拾っていきながら地域を作っていくことを考えていきたい。この2日間の学びをこれからからの実践につなげていきたいと思います。

最後に5人の報告者から一言をいただいてから分散会を終了した。